

住宅と健康の関連について、医学と建築学からの報告！（その1）

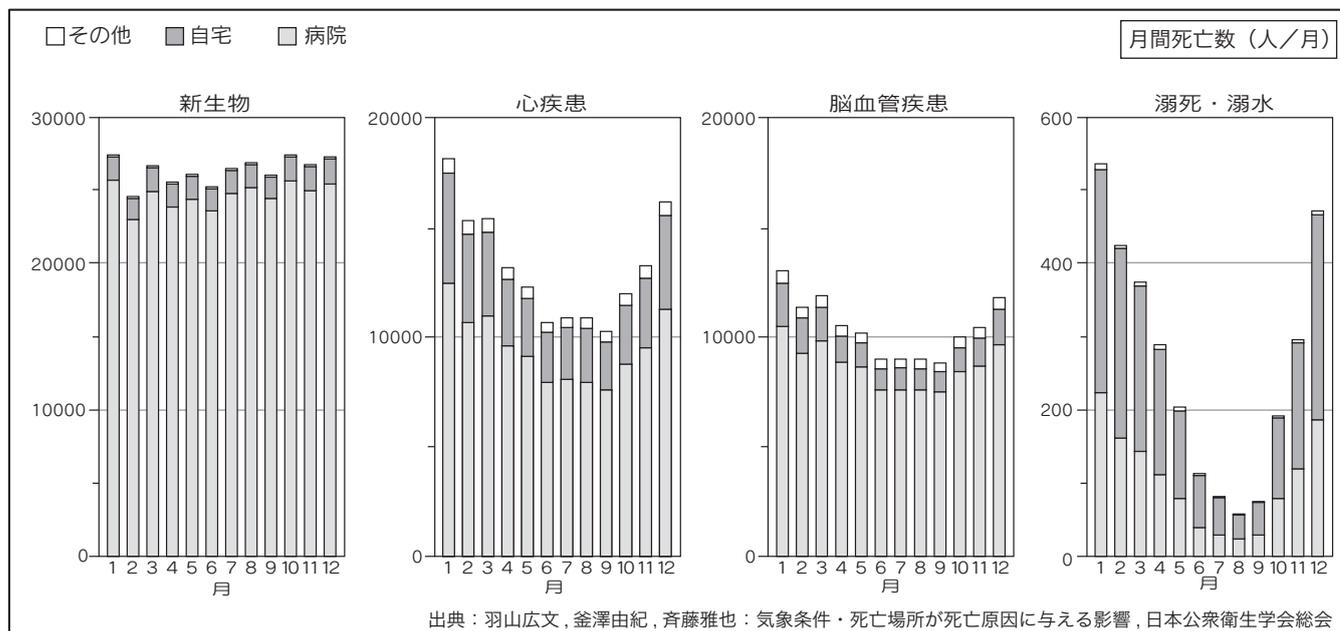
高額医療費の心配よりも、家族の命を守るために高断熱・高気密住宅が必要です。

温熱環境と死亡原因・死亡場所の関係

日本は現在、世界一の長寿国となりましたが、平成26年度の医療費は、42兆円強で年々1兆円の規模で増え続けています。下の表は、日本公衆衛生学会の「気象条件・死亡場所が死亡原因に与える影響」という調査内容です。

死亡原因の月別死亡数を場所別に比較すると病院医療の進歩した現在では、自宅よりも病院での死亡率が高くなっています。

死亡原因の比較では、新生物（主にガン）には法則性が無く月別の変化は少ないと考えられますが、その他の心疾患、脳血管疾患、溺死・溺水は10月から増え始め1月をピークにして冬期間の死亡率が高くなります。逆に死亡率の減少は、6月～8月の夏期に集中しています。要約しますと心疾患や脳血管疾患、溺死・溺水は、温度が低い冬の死亡率が高くなり、温度が高い夏期に少なくなることが判ります。特に注目して頂きたいのは、溺死・溺水で、病院での死亡率よりも家庭での死亡率が圧倒的に高く、しかも冬の死亡率が夏期とは比較にならないほど高率なことです。これはCPA（入浴中心肺停止）によるものです。



2015年度の国民医療費は42兆3千6百億円

溺死や溺水の原因が入浴時の室内の温度差（ヒートショック）が原因であることが考えられるからです。入浴時に寒い脱衣所で脱衣し、風呂場に入った時点でヒートショックを起こし、風呂の中で転倒して溺死・溺水に繋がっているケースが考えられます。

心疾患・脳血管疾患、溺死・溺水の死亡率を軽減させるためには、ヒートショックを起こさせない温熱環境を持った住環境が重要になります。

浴室で足を滑らせるなど、単純な原因も考えられますが、夏季と冬季の極端な死亡率から類推できる事は、暖房室と浴室・トイレ・廊下などの極端な温度差です。

以前、南九州は、日本で最も脳血管疾患の多い地域に属するという紹介を致しましたが、溺死・溺水も実際は脳血管疾患のケースが多いようです。

温熱環境の整った住環境が求められるゆえんです。